

## 盲人歩行シミュレーション体験による盲人能力観の変容：公民館活動において実践したネガティブな障害観を変容させる試み

著者	徳田 克己
雑誌名	視覚障害心理・教育研究
巻	9
ページ	23-26
発行年	1992-12-25
その他のタイトル	The Effects of Blind Simulation on Attitudes toward Visually Handicapped Persons
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124836">http://hdl.handle.net/2241/00124836</a>

# 盲人歩行シミュレーション体験による盲人能力観の変容

—公民館活動において実践したネガティブな障害観を変容させる試み—

筑波大学 徳田 克己

## I はじめに

視覚障害児・者に対して「視覚障害を持つ人は特殊な能力を持っており、自分たちとは異なる存在である」と感じている一般の人が多くいることがいくつかの研究によって指摘されている（河内, 1990; 徳田, 1989a; 1991; 佐島・徳田, 1991）。この見方は視覚障害者の能力を正しく認識しているとは言えない。「盲人は相手の心の中をよみとることができる」「点字触読や白杖歩行には持って生まれた能力が必要である」という一般の人が持ちやすい誤解は、コミュニケーションや社会的自立の障壁となる可能性があり、正しい認識を与える福祉教育的方法論が議論される必要がある。

佐島・徳田（1991）、徳田・佐藤（1991）は正しい認識を与えるための一方法として大学の授業や公民館活動などにおいて「点字の学習と触読のシミュレーション体験を持つ活動」を実践し、それが盲人の能力観にいかなる影響を与えるかを検証している。本報告では、公民館での社会教育場面で行った「盲人歩行シミュレーション体験を持つ活動」を取りあげ、その能力観変容効果について報告したい。

## II 盲人歩行シミュレーションについて

盲人歩行シミュレーションによる態度変容技法は、目かくしを用いて視覚障害の状態を擬似体験する方法である。その状態にならないと本当のその人の気持ちや立場は理解できないと言われるが、このシミュレーション法はその状態に近い体験を持つことで視覚障害者の感じる不便や不安を肌で感じ、認識を深めることを目的としている。

WilsonとAlcorn（1969）は被験者に8時間の障害シミュレーションを行わせたが、その後被験者に有意な態度の変容が見られなかったことを報告している。この実験で被験者がおこなったシミュレーションは①盲（目に不透明な包帯をす

る）、②難聴（耳栓をする）、③利き手を失った状態（利き手を身体にしばりつける）、④足を失った状態（車いすにすわる）の4つであった。有意な態度の変容が見られなかった理由として、彼らは、シミュレーションにおいて、実際に被験者が障害者の擬似体験をしたかどうかが明確でないことを挙げている。すなわちこの実験では、現実には障害をもつ人が受けている「障害者としてのdisability」を体験したのではなく、不便さのみが強調された「障害のdisability」だけを体験した可能性があると考えられるのである。これに対してCloreとJeffrey（1972）は、条件が十分に統制された実験を行い、障害のシミュレーションによって態度が有意に変容し、しかもその効果が4か月間持続するという結果を得た。この実験がWilsonとAlcorn（1969）の実験と大きく異なったのは、周囲の一般人がシミュレーション体験者をどのような目で見ているかを常にフィードバックできる点であった。つまり、「障害者としてのdisability」を体験できたわけである。

また徳田（1989b）は、短期大学幼児教育科女子学生を被験者に選び、盲人歩行シミュレーション体験の態度変容に及ぼす影響を確かめている。その実験では、被験者はまず教室内で視覚障害者の手引きの方法の講義を受け、その後ペアになり、ひとりがアイマスクをして視覚障害者のシミュレーションを行い、残りのひとりがその手引き者となって校舎内を歩行した。さらに、校舎より約100メートル離れている公園まで、点字ブロックにそって歩行した。公園内では、手引き者に援助されながら遊具（ブランコ、滑り台など）を体験したり、いろいろな物を触察した。その後、点字ブロックを利用して学内まで独力で歩行し、教室内に戻った。学内、道路、公園内には実験に無関係の多くの人が出たが、それら周囲の人の様子は手引き者を通じて被験者に詳細に伝えられた。こ

の手続きによって被験者は「障害者としての disability」を多少とも体験できたと思われる。アイマスクをして約1時間のシミュレーションを行った被験者の態度の変化についてみると、「視覚障害者は特殊な能力を持っている」とする誤った認識が弱まる傾向が認められた。これは自分でもアイマスクをした状態で歩くことができ、またさわることによって多くの物がわかるという被験者の自己体験が「盲人は超能力とも言えるほどの特殊な能力を備えている」という考えを変化させたのである。「手引き体験法」（徳田，1990）では盲人と一緒に歩いたにもかかわらず、学生の擬似体験がなかったために盲人の能力を過大評価しすぎる結果となっている。

### III 方法

①被験者

埼玉県川口市青木公民館および前川公民館において開催された講座に参加した成人婦人90名（28歳～63歳）。

## ②手続き

川口市青木公民館の平成2年度家庭教育講座および同前川公民館の平成2年度婦人学級に任意に参加した被験者に対して、まず盲人の能力観を調べるための質問紙調査をプリテストとして行った。続いて、講義室内で視覚障害者の手引きの方法の講義を受け(20分)、その後ふたりずつの組になり、ひとりがアイマスクをして盲人歩行のシミュレーションをおこない、残りのひとりがその手引き者となって公民館内と建物周辺を歩行した(30分)。途中で盲人役と手引き者役は交代した。またその際、路上や建物内のいろいろなもの(植物、自転車、電柱、消火器、ネームプレート、自動車など)を触察する体験を持った。その後ポストテストが行われ、終了後、盲人の教育や心理学の特性に関する講義が行われた(60分)。

### ③使用した質問紙

盲人の能力観を調べるための尺度として徳田(1991)の考案した13項目から構成されている「盲人能力観尺度」を用いた。この尺度は盲人の能力と対象者自身の能力を対比して回答させるものであり、「盲人の持つ能力が訓練や経験の結果である」と認識しているかどうかが明らかになるもの

である。回答は7件法によって求めた。また結果は間隔尺度のデータとして処理した。その項目を以下に示す。

- [illegible]

#### IV 結 果

表1に、盲人歩行シミュレーション体験前後の各項目の得点とそれらの平均の差を確かめるための対応のあるt検定の結果を示した。全体的にみると、13項目のうち11項目について体験前後に有意な得点の変化があったことが確認できた。点字触読体験(徳田・佐藤, 1991)では8項目に有意な得点の変化が認められているので、全体的な変容効果は今回の盲人歩行シミュレーション体験法の方が大きかったと言えよう。

第1項目の「盲人は特別な能力を持っているか」については、学習前にはかなり強くそのような能力を認めていたが、盲人歩行シミュレーションを体験した後ではその傾向はなくなっている。また、

表1 盲人歩行シミュレーション体験の変容結果

項目番号	体験前	体験後	t 値	危険率
1	2.54	4.00	5.36	1%
2	2.59	4.31	6.22	1%
3	4.66	3.02	6.39	1%
4	2.74	4.29	5.53	1%
5	3.41	2.24	5.26	1%
6	2.99	3.63	2.86	1%
7	3.66	3.31	1.64	—
8	1.90	2.68	3.49	1%
9	3.66	2.94	2.95	1%
10	1.76	2.44	3.20	1%
11	3.71	3.10	2.53	5%
12	3.02	3.41	2.05	5%
13	4.00	3.60	1.94	—

第2項目の「盲人が白い杖をつきながらひとりで歩くには特別な能力を必要とするか」において体験後には「特別な能力を必要としない」方向に能力観が変容していること、および第3項目の「あなたも訓練すれば、目かくしをして、杖を使ってひとりで歩けるか」において体験後に「自分も歩ける」と強く感じるようになることなどの結果から、今回の盲人歩行シミュレーションの体験によって、被験者は盲人の能力を正しく認識できるようになったことが確認された。

第4項目の「盲人が指先で点字を読むには特別な能力が必要か」において、体験後には「特別な能力を必要としない」方向に能力観が変容し、また第5項目の「あなたは訓練すれば指先で点字を読むことができるか」において「できる」方向に意見が変容した。直接的に点字触読を体験していないにもかかわらず、これらの項目に変容がみられたのは、盲人歩行シミュレーション体験による変容効果の般化があったためであろう。徳田・佐藤（1991）によれば点字触読体験によっても盲人の歩行や他の能力に対して適正な評価を行うようになり、変容効果の般化があることが確認されている。

同様に第8項目の「盲人は正眼者に比べて聴覚が良いか」、第10項目の「盲人はかんが鋭いか」の2項目において、体験後に、盲人の能力を正しく認識する方向に意見が変容していることも効果の般化がみられている点である。

## V まとめ

本実験および点字触読体験の効果検証実験（徳田・佐藤，1991；佐島・徳田，1991）の結果から以下のことが導かれる。

- ①盲人の能力についての正しい認識は、情動的な反応のみが生起される手続きでは形成されない。
- ②盲人の持つ能力についての客観的な内容の情報を講義などによって伝達することは、盲人の能力観の変容のための必要条件である。
- ③客観的情報の提供に加えて、視覚障害のシミュレーション（点字触読，盲人歩行，教材の触察など）が実施されることで、変容効果を高め得る。また、変容効果の般化現象がみられる。

盲人の持っている能力に対する評価は、文化や価値観の影響を受けているものの、個人の体験に規定されるところが大きいと考えられる。その体験とは、盲人との直接的な接触体験だけに限らず、家族や友人の話やテレビ・小説などを通じた間接的体験を含んだものである。現代は情報化社会であり、さまざまなメディアによって障害や障害者に関する話題が多く提供されている。誤った、あるいは誇張された情報によって、障害者に対してステレオタイプ化されたイメージが形成されることは障害者の社会的自立のためにも避けなければならない。

そのためには、小学校、中学校段階での系統的な福祉教育が必要となる。誤った、あるいは誇張された情報にふれてステレオタイプ化されたイメージが形成される前に、正確な知識が与えられ、正しい認識が形成される手続きがとられなければならない。しかし、その手続きは単なる情報の伝達に終わってはならず、将来にわたって正しい認識を持続することができ、しかも障害児・者に対する実際の援助行動を生起させるものでなければ教育効果があるとは言えない。また福祉教育の重要性は高等教育や社会教育においても同様であり、態度や能力観の変容に対する抵抗が小学校・中学校段階に比べて大きいとはいえ、生涯教育の視点から進めていく必要がある。

特に、幼児や児童を持つ母親に対する働きかけが家庭内での話題の増加につながり、子供の態度変容に効果的であることを柴川・徳田・佐島

(1991, 1992) が日本保育学会において報告しており、その知見にもとづいてPTA活動などにおける障害理解教育活動を継続的に実践している。

今後は生涯教育の中での障害理解教育を進めていくとともに、各実践の教育的効果を態度変容と援助行動発現の視点から評価していきたいと考えている。

## 参考文献

- 1) Clore, G. L. and Jeffrey, K. M. (1972)  
Emotional role playing, attitude change and attraction toward a disabled person, *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 105-111.
- 2) 河内清彦(1990) 学生および教師の視覚障害者観, 文化書房博文社
- 3) 佐島毅・徳田克己(1991) 視覚障害者に対する態度変容における触読体験の効果—盲人の持つ能力の評価について—, 視覚障害心理・教育研究, 8(1・2), 19-22.
- 4) 佐藤泰正(1974) 視覚障害児の心理学 学芸図書
- 5) 柴川明子・徳田克己・佐島毅(1991) 母親に対する福祉教育は子供に何を伝えるか(1)—盲学校見学法—, 日本保育学会第44回大会発表論文集, 638-639.
- 6) 柴川明子・徳田克己・佐島毅(1992) 母親に対する福祉教育は子供に何を伝えるか(2)—障害児を題材とした映像を用いて—, 日本保育学会第45回大会発表論文集, 524-525.
- 7) 徳田克己(1989a) 授業において盲人に対する態度を好意的に変容させるためにはどのような講義内容を準備すべきか, 桐花教育研究所紀要, 2, 23-32.
- 8) 徳田克己(1989b) 視覚障害者に対する態度を好意的に変容させるためのシミュレーション法, 視覚障害心理・教育研究, 6(1), 19-23.
- 9) 徳田克己(1990) 視覚障害児・者に対する一般の人の態度を改善するための技法とその評価, 視覚障害心理・教育研究, 7(1・2), 5-21.
- 10) 徳田克己(1991) 盲人の持つ能力の評価に関する研究, 視覚障害心理・教育研究, 8(1・2), 7-14.
- 11) 徳田克己・佐藤泰正(1991) 公民館活動において実践したネガティブな障害者観を変容させる試み(1)—点字触読体験による盲人能力観の変容—, 日本教育心理学会第33回大会発表論文集, 895-896.
- 12) Wilson, E. E. and Alcorn, D. (1969) Disability stimulation and development of attitudes toward the exceptional, *Journal of Special Education*, 3(3), 303-307.